



TITLE:

倉敷通信 (時の記念號)

AUTHOR(S):

荒木, 健兒

---

CITATION:

荒木, 健兒. 倉敷通信 (時の記念號). 天界 1932, 12(134): 249-250

ISSUE DATE:

1932-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161968>

RIGHT:

## 倉 敷 通 信

倉敷天文臺 荒 木 健 児

四月七日附で、岐阜縣の熱心な觀測家廣瀬君が書いてゐる中に、次の一節がある――

名古屋で、大勢通る人々のうちで、この月蝕を見上げる人は一人も私は見ませんでした、どうしてかうなんだろう？ もつともつと天文の知識を大衆に普及させなければならないとつくづく思ひました。

と、大いに憤慨の態であるが、憤慨してもうけたのは廣瀬君で、倉敷傑作の満月と月蝕との寫眞にありついたのである。うらやましい諸君は來る九月の月蝕の機會を巧にとらへること。

倉敷の奇談珍景はいくらでもあるが、その内尤なるものを一つ御紹介に及ぶとする、鳩居堂の風雅な藁紙にさらさらと美しい毛筆を走らす紳士が、觀測室内にはりつけてある古賀恒星圖を見て、

『これ等澤山の星星の中で、地球はどれですか――？』

なる重大質問を發して超然としてゐる。私は驚きの餘り茫然としてゐる。笑はうにも笑はれない。

天文臺の座敷だから、床に恒星圖がかかつてゐても、別に不思議はない筈であるが、世の中は妙なもので、感心する人があると同時にひやかすお方もある。そこで――といふわけではないが、この頃は恒星圖が左遷されて、堂堂たるものが位を占めてゐる。水野先生から拜借してゐるので、語に曰く。

宇宙便是吾心吾心則是宇宙

と、實に達筆であり、これをしづかに見てゐると、天文臺構内へ、今にも大宇宙の百兆億萬分の一位の大型石が落ちて來さうに思はれてたらない。この實現はむつかしいとしても、

まさやけき 星をあふきて この刹那

思ふことなれ 心たらひぬ × ×

と誰かのお歌にもあつた如く、天文はありがたいと思ふことである。

## 四月例会記事

四月廿參日 朝からどんより曇つた空は晝近くになつてとうとう細い雨に變り、風も加つたが、今日の貴重な展覧會を見んものと岡山からは水野先生が見え、大阪からの來會者もあり次第に會員の顔もふえてゐつた。

正三時 水野先生の御挨拶よりプログラムは初まる。山本會長が“我が開國文化と天文學”と題して昔の我が國は天文方面に研究が意外に進められて居た事を徳川初期より年を追つて御説明になり、最後に目下御研究中の江州の國友一貫齋の晩年の種々の觀測の正確さが全く驚くに足る業跡であることを御話になつて、來聽者皆驚異の目を墮り、次いで中村要氏が國友藤兵衛一貫齋の作りし望遠鏡につきて<sup>7</sup>の演題のもとに一貫齋が研究の上の研究が目前に見られる立派なレンズや設備不完全の當時でこれ程の望遠鏡を製作せられた苦心を唯驚嘆の二字のもとより御話になつて聽くもの更に一貫齋の偉業を敬服した。

講演がすんで、わざわざ國友家より御出品下さつた數々の貴重な品々を心ゆくばかり心にきざんで五月雨にくもる山道に五時過ぎに下る。

當日の御出品の品々。

國友一貫齋の天文遺跡・藏書・書翰・太陽黑點觀測・自作のテレスコップ遠目鏡・遠目鏡の製作覺書設計圖

日月星業試留

福王頤生享の遺書類

参考古書……水野千里氏出品

## 新 會 員

中村 美 亮 名古屋市西區橋詰町30  
小泉美枝子 大阪市東成區東桃谷町一丁目5828  
神納志を子 大阪市北區興力町28  
笹 部 榮 一 大阪府池田町室町九番丁  
大 熊 安 雄 福岡市大國寺町五番地  
須 藤 俊 夫 東京府世田谷町鶴免2277

中 村 進 東京府澁谷町青山學院  
古 賀 安 一 岡山市三門關西中學校  
野村彦次郎 神戸市林田區前原町108  
飯 島 友 夫 札幌市圓山南二條四丁目井上方  
毛利圭太郎 廣島市段原町686